

日韓教育メディア釜山国際学会とユネスコ APEID

市川 昌

日韓教育メディア国際学会（Japan Korea Joint International Conference for Educational Media Study）は、2年前から韓国教育メディア学会 KAEM（Korea Association for Educational Media）と日本教育メディア学会 JAEMS（Japan Association for Educational Media Study）が、日韓交互で会場校となり、英語で研究報告、討論交流をする学術組織である。

2003年はソウル、2004年は関西大学、そして2005年は9月8日から9月12日まで釜山国際会議場で第三回が行われた。今年は APEC 閣僚会議が釜山で行われるので、併せて APEC サイバー教育会議と共催で行われ、研究者部会と同時に学生部会が行われたので、日本から東京学芸大、大阪大、日大、関西大、岩手県立大、日本福祉大、上越教育大、江戸川大、メディア教育開発センターなど100名、韓国側はソウル大、梨花女子大、釜山教育大、KBS、ETV、サムソン、IBMなど電気通信メーカー、教育ジャーナリスト、教育省、韓国政府、ソウル・釜山など地方教育委員会、小中高教員など200名が参加し、ゲスト・オブザーバーで USA、タイ、インドネシア、フィリピンなどの教育工学研究者、大学教授も参加して盛況であった。2006年は7月に日大文理学部が担当、東京オリンピック青少年センターを会場として実施予定である。英文教育メディア研究報告書は、“Learning Media and Technology for Future Education and Training” 2005にまとめられた。専門家部会での討議の焦点は、教育メディアの中核になったマルチメディア環境の整備に伴う都市部と農漁村部などの地域格差是正と、教師教育カリキュラムの改善および良質のデータベース開発

の方法論であった。また理論研究では教育工学研究に人間の認知過程や脳の思考回路の研究を生かして、システムの効率論のなかで忘れられがちな道徳性の強化学習論、アジア的な価値意識の多様性を確保するノウハウなどが主題となった。

日韓教育メディア会議とあわせて韓国の ICT（Information and Communication Technology）モデル小中学校授業参観が行われた。韓国の教育熱は大学受験の激化、異常な教育塾ブーム、幼児からの英才教育が特徴で確かに ICT モデル学校の学力レベルでは、参観した英語、数学で日本よりも上位レベルにあり教育密度は高い。しかし理科の実験設備はまだ貧弱、社会科の地理教育などの教材整備は遅れ、芸術科、家政科の教育方法は硬直化し広がりやを欠いていた。特色があったのは愛国教育（月1回ないし2回、チマチョゴリ着用で朝鮮民族の誇りを持たせ、教室には韓国国旗、祖国を愛し、道徳を守る毎朝の朝礼）と環境教育（環境美化および清掃の徹底、学校園などの草花植物、動物飼育、地域社会奉仕）などが ICT モデル学校では重視される。校長に聞くとエゴイスト的個人主義に英才教育がならないように、ICT 教育はコンピュータ技術だけでなく自立、奉仕、献身の儒教精神教育を大切にしているということであった。地域の父母会など PTA などの両親の積極的學校奉仕が求められて、我々部外者の参観の世話も父母のボランティアで実施されていた。校長、教頭、先生方には英語、日本語ができる人が多い。日本の学校との比較を知りたいが教育方法は「反日から競日へ、学力で日本を越える」猛烈な競争意識、国際的評価向上への熱望を感じたが、背伸びからくる息苦しさも否定できな

い。筆者の訪問した釜山市立 Miran Elementary School (美蘭小学校) は生徒数 570 名, 教員 35 名 (含む管理職・専門職教員 10 名)。21 学級 (含む 2 障害児級), スポーツ部活はサッカー・テニス・野球・舞踊。1 クラス定員は 35 名である。

英語授業

釜山市の小学校の英語授業は, 小学校 3 年生から開始。国際人をめざし英語コミュニケーション能力の基礎を目標としている。参観した 6 年生のクラスでは, ビデオでの英語会話, パソコンでの英文完成テスト, 教室の OHP 実物投影を使った英文法, 英語構文練習, 簡単な英作文を教えている。レベルは高く日本の中学 2 年生くらいである。OHP ではフラッシュ・カード, ドリル練習を実施。教員は韓国女性だがアメリカ留学経験があり, QA はスピード感とリズム感があった。TA 教員 1 名。基礎的なパターン・プラクティスの反復練習が印象的であった。

道徳・礼節授業

全員がチマチョゴリを着て, 起立まず韓国国歌合唱。相互に挨拶の仕方を練習し直しあう。着席して放送ビデオ教材で伝統的な「アリランの歌」について, 歴史的な由来, 祖国愛と民謡の意味の解釈, 専門家による歌唱の視聴をする。教室教師がピアノで「アリランの歌」の歌唱指導を実施。歌唱ができるようになると「アリランの歌」の舞踊実技。指導は教師とともに母親ボランティアによる伝統舞踊のグループ別実習が行われていた。補助父母 2 名。

社会科・地理授業

放送ビデオによる「ASEAN (東南アジア諸国連合)」視聴教室は机上のパソコン (ふたり 1 台) 整備の特別教室。授業冒頭に放送ビデオ「ASEAN」を全員が個別パソコン経由で視聴後, 教員補足説明, 討論後パソコンでインターネットによるアジア諸国の教育情報検索が事後指導で行われた。マルチメディア環境の活用と児童の発表力の向上が課題となっている。

ユネスコの APEID アジア・太平洋教育革新国際セミナー (Asian Pacific Educational Innovation Development) は, ユネスコ・アジア本部と SEAMEO (東南アジア地域教育相会議機構) が共催で, 日本の東京学芸大学を会場に毎年 9 月に, アジア・太平洋地域の教育工学研究者, 教育政策担当者, 視聴覚教育研究者を集めて, アジア地域の教育改革について討議する国際学会である。2005 年度も 9 月 1 日から 9 月 7 日まで「アジア諸国の教育実践の質的向上のためのメディア活用方法」について, ニュージーランド, オーストラリア, インドネシア, タイ, ラオス, フィリピン, 中国, 韓国, 日本の関係者が招待された。筆者も日本のオブザーバーのひとりとしてその一部に参加した。この国際セミナーは, カントリー・レポートとしてアジア各国の代表が, その国の教育工学, 視聴覚教育の現状と今後のメディア教育戦略について報告するのでアジア情勢についての相互の貴重な学術資料収集の機会でもある。今年の特徴は, ニュージーランド教育省メディア政策担当官が全体討論の司会を担当して, タイ, 韓国の研究者が副司会者としてサポートし, ハードの教育工学機材としてのコンピュータ環境が都市を中心に全国的に整備されつつあるなかで, 教室教師の再研修による質的向上が望まれること, さらに安価な教育的に有効なソフトが不足している現状分析の報告, 改善のための途上国援助の方策が討議されたことである。わが国の実情をみても, 中学, 高校のコンピュータ機材の教室配備が進むなかで, 情報教育が情報機器操作教育に追われ, 人文・理数・社会などの教科学習とのカリキュラム交流と情報の相互関連の不足が指摘されている。さらに情報教育のための著作権, 知的財産権など法的環境教育の遅れも目立っている。この現状はアジア諸国においても同様の危機感があり, 日本における情報教育のあり方がモデルとして関心を持たれた。アジア・太平洋諸国との比較教育研究については, これからの領域であり今後の発展を期待したい。